

わがままな ^{こひー} コヒー と
^{がっこう} 学校の ^{ともだち} 友達

6巻：^{しんゆう}親友でも ^{みち}道はちがう



文 さくらい ゆうせい
絵 うすい ゆみこ



ここでは ^{おや}親とはぐれた ^{ことり}小鳥たちの ^{ちい}小さな ^{がっこう}学校。

コビー達は ^{たち}四葉の ^{よつば}クローバー ^{たいさくせん}大作戦で、
ど ^{なかよ}ん ^よ仲良くなっているようです。

サニーが ^きオレンジの ^き木に ^なぶら ^い下がり、
お ^き決まりの ^なチャイムを ^い鳴らして ^い言いました。

「キーンコーン カーンコーン！」

さあ ^{じげんめ}4時 ^{じゆぎょう}限目の ^き授業は

ライライが ^{なや}バトラーの ^き悩みを ^{ばん}聴く番だよ！」



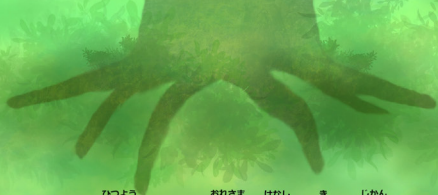
いつも仲間と距離をとり、触れられる事も嫌がる
バトラーですが、どんな悩みがあるのでしょうか？

ライライはバトラーに気を付けて、少しはなれた
所から言いました。

『バトラー！ もし良かったら、今度はあなたの
話を聞かせてくれないかしら？』

「俺様は悩みなんかないから必要ないよ」

『そうよね！ 必要ないわよね』



「そう、必要ない！ 俺様の話を聞く時間があるなら
もっと困ってる友達の話も聞いてやれよ」

『さすがだわバトラー！』

少し偉そうな話し方だけど、とっても仲間思いで
友情を大事にするわね。

私はそんなバトラーの

男らしいところが大好きよ！』



「なに？男らしいって？」

ムフフ、そうさ！俺様はいつだって
男らしい森の戦士さ！」

『もし悩みがないなら、どうしたら男らしい
戦士の心になれるのか、教えてくれないかしら？』

「そうだなあ～ それなら教えてやってもいいぜ」



『私ね！つつい手を出して、仲間を
手伝ってしまうのよ。それで感謝されなかったり、
本人が動かないと腹が立ってしまうの』

「ライライらしいな」

『どうしたらバトラーのように、ドンと構えて
いられるのかしら・・・』

「う～ん、それは難しい質問だな。
みんなもそうだけど、俺様にも色々あるんだ・・・
しかし、本当に強い男ってのは言い訳はしない。
だから、いくらライライの頼みでも話さないぜ」





わたし バトラーの 言い訳には 興味ないわ。

どうやって 乗り越えてきたか を
聴かせて くれな^いかしら？』

「なるほど！ 乗り越え方を 知りたいんだな。

それなら 教えて やらなくもない」

『みんなのためにも ぜ^{ねが}ひお願い！』

「俺様はな！ 暴力なんて 毎日受けるのが
普通だったんだよ」

『やっぱり お父さんが 厳しかったから？』

「あ～そうさ！ あの親父ときたら、従わないと
死ぬほど 殴り続けるのさ」

『そんなの無茶苦茶よ！

バトラーだって まだ子供よ！』

「だからな、言い訳なんて 出来ないんだよ。

自分の気持ちを 言う権利すら ないんだ・・・」

『可哀想到・・・

言い訳どころか 話す権利すら ないのね・・・

それじゃあ、親子の会話は どうしてるの？』

「仕方がないから 他の家族を 観察するんだ。

それも心の 深い所までな！」

ためしよみ

は

ここまでです